

研究通信

特別号

1991年7月10日刊
研究会局
村落社会事務局
同志社大学人文科学研究所
庄司俊作
京都市上京区今出川通烏丸東入ル
TEL 075-251-3957

村落社会研究会事務局からの呼びかけ

新しい共通課題の設定のために、そしてまた、研究会の今後の運営のために、すべての会員諸兄姉のご意見をお聞かせてください。

一九九〇年十二月 事務局

今年一月に実施したアンケートを公表いたします。当初、事務局で集約のうえ公表することを考えましたが、生のままの方が会員の参考になるかと判断し、回答をそのまま掲載することにいたしました。アンケートでは事務局から「呼びかけ」を行ない、回答があまり散漫にならないよう注意しましたが、多様な回答が得られました。アンケートは、今年度の大企画共通課題を決定するに当たって大変参考になりました。回答を寄せられた多数の会員の方々にお礼を申し上げます。

なお、掲載は個人別にし（到着順）、(1)現在の研究テーマ、(2)現在の調査対象地域、(3)(1)以外に現在関心あるテーマ、(4)村研の共通課題に関する提案、(5)村研の運営全般に関する意見、の順とします。記載のない項目についてはカットしました。また、アンケート回答用紙に氏名記入欄を設けなかったため、一部お名前が落ちている会員の方もおられます、お詫びいたします。

(事務局)

今日、日本の農業と農村は国際状況の中で、それにもまして国内にも厳しい位置に立たされている。この中で村研は近く迎える四十周年（一九九二年）を一つの節目として、今までの研究成果を受け継ぎつつ、今日生起する重要課題に追って行き、新しい今日の共通課題を模索していかなければならない。さきの運営委員会（一九九一年十月十七日）では、一九九一年度の共通課題名の設定に至らなかった。そこで今回、事務局はすべての会員に別紙のような型式で、会員の現在の研究テーマ、村研の共通テーマ設定への提案、および村研運営への具体的意見を求めることにした。

(1)振り返れば、蓮見彦彦会員は、村研三十周年を目前にして三十年間を振り返り、共通課題の設定を吟味して、「村研三十年の軌跡と今日の課題」（『研究通信』第三五号、一九九一年）を記した。その中で、「この三十年間の村落研究がはたしてそれぞれの時期に適切な問題意識をもって対象に迫り、その時期の村落社会にとって解明されるべき課題を把握していたのか否か」（P・4）と問い合わせた。

村研三十周年をへて、その後の共通課題名は次のように示される。

一九八一年度 農政と村落

一九八二年度 土地利用秩序と村落の土地管理機能

「六六年度 土地と村落—村落の変貌と土地利用秩序—

「六七年度 土地と村落—戦後土地所有の变化と地域農業—

「六八年度 農村社会編成の論理と展開—転換期における家と村落—

「六九年度 農村社会編成の論理と展開—転換期の家と農業経営—

「五〇年度 農村社会編成の論理と展開

この八年間のテーマ設定は、蓮見会員の問い合わせなどのように関わってきたのであろうか。

(2) 最近の「研究通信」を見るとい、村研三十周年の直後（「六三年」月）（現在）に、愛知大学担当の事務局で「会員研究動向」（「研究通信」第三号、「六三年」）をまとめたことがあり、それには一七一名の会員（約半数）から回答が寄せられていた。その回答からあらためて会員の多様な問題関心をうかがい知ることができる。しかし、これらの問題関心をいくつかの整理項目に集約して提示する事はむずかしい。この「会員研究動向調査」は、会員相互の情報交換として有益であったが、それ以外に、どのように有効に利用され、あるいは共通課題設定のうえに反映されたか不明確である。

(3) 現代の農業・農村をめぐる厳しい状況の下で、「イエ・ムラ」論の方法的有効性がますます問われるようになつたこの間、運営委員会において大会の共通課題について論議する中で、以下のよいうなテーマ・意見が出された。

- ① 「イエ・ムラ」論の意義と問題点に関する現代的総括。
- ② 「イエ・ムラ」論の再検討として、農協、生産組織、土地改良区などのテーマ化。
- ③ 地方、地域、コミュニティ論の検討。
- ④ 環境問題のテーマ化。
- ⑤ 産直、有機農業、ナショナル・トラスト運動、リゾートなどのテーマ化。

マ化（「ニヨー・ファーマーズ」の研究）。

⑥国際比較論の積極的導入。

⑦ 欧米における新たな農政理念（「持続的農業」）の定着に対応した農村研究の検討。

以上の問題をふまえて、事務局では、アンケートという形で、共通課題を摸索するための試みをいまあらためて提示し、会員諸兄姉の協力を得たいと願う次第である。